



チョウジ



ボレイ



ジオウ



ウコン

方剤解説

補中益気湯の臨床応用



トウガシ



ウバイ



シソシ



オタネニンジン



コウカ



ビヤッキョウサン

黄 懷龍



クイジ



ブケニン

一、「脾胃論」と脾の生理機能

(一) 《脾胃論》について

「補中益気湯」の原典《脾胃論》は金の李東垣が1249年に著したものである。

李東垣は中国金元時代の四大医家の一人「補土派」の開祖である。「脾は土に属し、土は万物の母である。それゆえ脾胃が損傷されることが、発病の根本である」としている。すなわち補中益気湯は補土を以て治療の根本とした方剤であり、

(二) 脾の生理機能

1、脾は運化を主る

①水穀を運化する：飲食物の消化・吸収・輸送の機能である。脾は「後天之本」である。

②水湿を運化する：体の水液代謝、調節の機能である。

脾胃は「気血生化之源」である。

2、脾は統血を主る

脾気は血液の流れを統べて、脈管内を正常に運行させ、血脈の外へ漏れないような働きがある。「脾気固摂」と称する。

3、脾は昇清を主る

脾は水穀精微などの栄養物質を吸収して、肺に上がって、心肺の作用によって全身に散布させ、栄養提供を果たす。「脾気主昇」と言う。

二、補中益氣湯の組成と応用

補中益氣湯 《脾胃論》

（一）組成と特徴

補中益氣湯は補気血の黄耆、人参、当帰と陽気を昇発する升麻、柴胡など薬で組成され、益気昇陽の効能が持つ、中焦気虚、中気下陷を治療する代表方剤である。

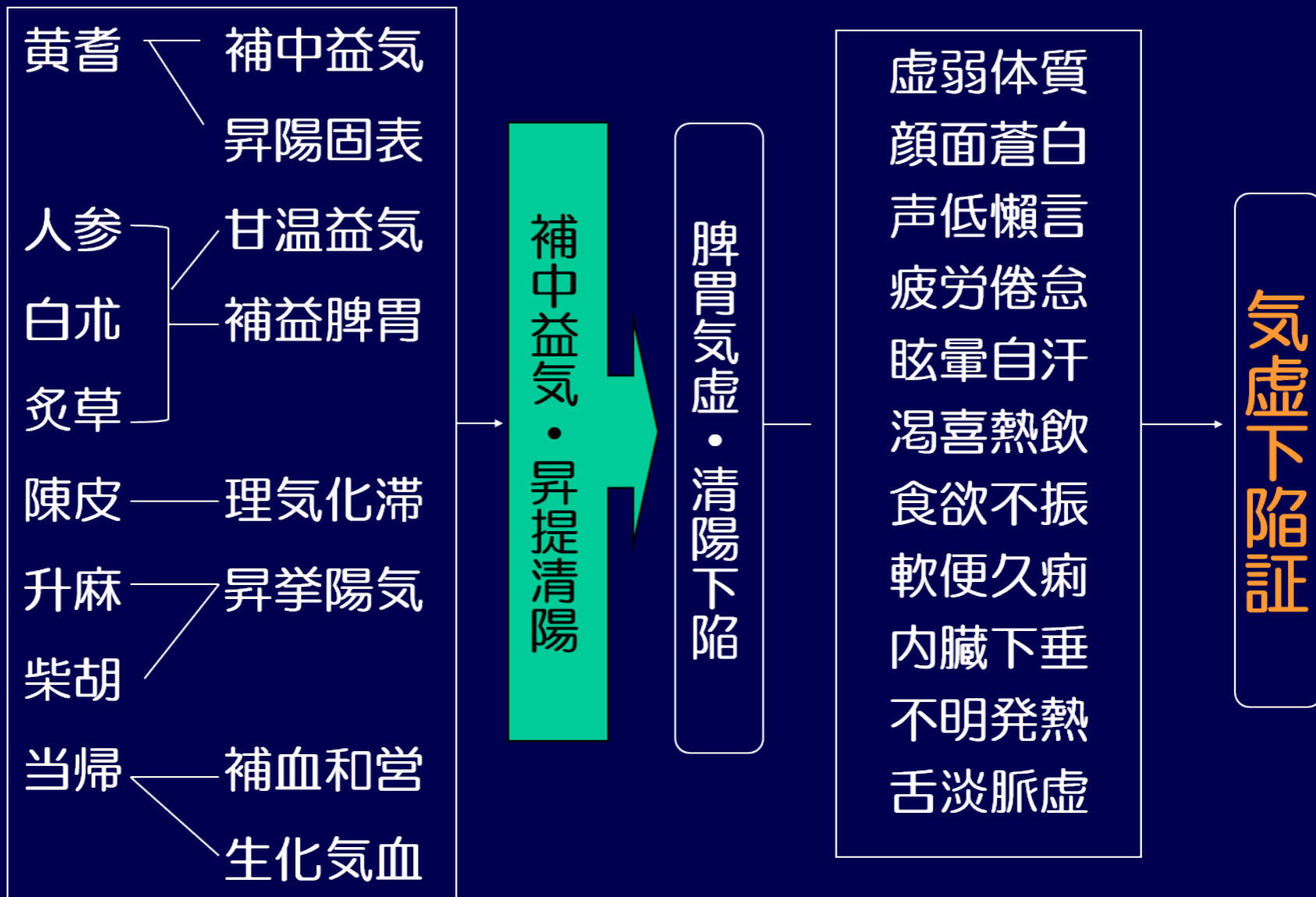
組 成	黄耆、人参、白朮、炙甘草、当帰、 陳皮、升麻、柴胡
効 能	補中益気、昇陽挙陷
主 治	脾胃気虚、中気下陷

方 解

- 主薬：**黄耆は補中益気、昇陽固表し、脾は肺気の本である
- 臣薬：**党参、白朮、炙甘草で甘温益気、補益脾胃。気虚陰火鬱熱に、甘温薬で元気を補い、虚熱をさますことは「甘温除大熱」も称する。人参黄耆を配伍し、脾肺両臓とも強壮に、正気は充実である。
- 佐薬：**陳皮で理気化滯、補でも粘滞しないこと当歸は補血和血、気を補うに「気は血の帥、血は気の母」補気は必ず和補血を兼ねる。
- 使薬：**升麻は陽明の清気を昇し、柴胡では少陽の清気を昇挙する、両薬を合せて、参、耆の昇陽作用を助けて、同時に外邪を発散し、気虚外感にも用いられる。

諸薬を合せて、補中益気、昇陽固表の効能を果たす、脾胃強壮、中気充足、即ち寒熱自ら取り除く、気陷を昇挙して脱肛、子宮下垂、慢性下痢など証を治療できる。

補中益氣湯の構成と応用



(二) 適應症

・本方は消化器の虚弱と筋緊張の低下による諸症状を改善するものである。

●脾胃気虚：消化機能の低下により、元気がない、食欲不振、手足がだるい、食べると眠くなる、立ちくらみなどの症状があらわれる。

●中気下陷：骨格筋、平滑筋、支持組織などの緊張低下が顕著になったもの。

●気虚発熱：慢性に反復する微熱、あるいは虚弱者の感冒に相当する。

(三) 臨床応用

- 疲労病後の倦怠感、寝汗、多汗症、手術前後の体力低下、夏バテ、胃切除後の貧血やダンピング症候群、起立性低血圧、脱肛、子宮脱、胃・腸アトニー、眼精疲労、尿大便の失禁、膀胱の収縮力低下、筋無力症、産後の子宮復古不全。
- 抗癌剤や放射線照射後の副作用（白血球減少・疲労倦怠感・宿酔など）の防止・慢性頭痛、慢性の微熱・胃腸虚弱児のアトピー性皮膚炎、虚弱児の体質改善。
- 術後の肉芽形成不全、易感染症の免疫力賦活（MRSAの感染防止など）。

臨床加減

素体気虚、風邪を引きやすい、或は気虚発熱不退、身倦多汗、舌淡脈虚など症候に本方で加減する。

- 気虚下陷による胃下垂、腎下垂、まぶた下垂など症候に、枳殻或は枳実を加えたら、更にいい効果を得られます、内臓の平滑筋収縮力、筋張力を増強するため。
- 本方に茯神、酸棗仁、遠志、竜眼肉を加えると養心安神の効能を増強する、よく脾虚による心神不安症、動悸食少、或は崩漏など、「帰脾湯」という。
- 気虚発熱に悪寒が甚だしければ、附子を加えて、全身酸痛では桂枝、桑寄生を加えて、
- 胃脘悶悪心嘔吐では厚朴、砂仁、白豆蔻を加える。

・使用上の留意点

- ・ 使いやすい方剤であるが、温性なので陰虚火旺証（熱性の発熱）に用いてはならない。

＊陰虚火旺：腎陰が虚したために相対的に虚火が亢進し、イライラ、怒りっぽい、両頬の紅潮、性欲亢進、口渇などの症状が現れること。

三、臨床症例



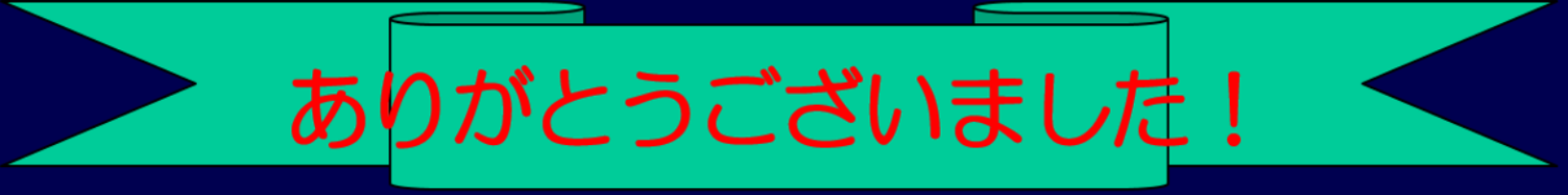
症例1・疲労感を主訴とする肺結核

・四二歳の婦人。約一〇年前、産後から弱くなり、肺結核といわれた。色の白い美しい婦人で、皮膚や筋肉が軟弱で緊張性がとぼしい。訪問客が多く、客の応接をすると、ひどく疲れる。ときどき悪寒の後高熱を出し、強く発汗して下熱する。寒い日にあうと、背が痛み、めまいと頭重が起こる。下肢が冷え、夏でも足袋をぬげない。小便は多くて近い。脈は弱いが頻数ではない。聴診上胸部に大した変化はない。

・補中益気湯二～三週間服用により疲れが減少し、めまいもとれた。背も痛まず、元気づいてきた。かぜをひきやすく、桂枝加黄耆湯でよくなる。足の冷えがよくなる。

補中益氣湯を六カ月のんだあとで、真武湯に転方した。これで筋肉のしまりがよくなり、足の冷えることも減って、一年近くのんで普通の仕事をしてても疲れなくなっていて休薬した。

補中益氣湯は・手足がだるい、眼に力がない、言葉が弱々しい、熱いものをよろこぶ、口に白い泡沫のつばがたまる・食事に味がない臍部で動悸がする、脈が大きくしまりがないという症状のうち、二つか三つの症状があれば用いてよいことになっている。また、食事をするとだるくなり、眠くなるというのも、この方を用いる目標である・肺結核に限らず、何病に用いてもよい。



ありがとうございました！